街道を歩く

東海道駿河以東03：興津川一倉沢一由比-蒲原神沢

薩ッタ峠 （東海の親不知）

東海道難所の1つ。道は3つあったという。1つは、海岸沿いの道。一番古く(下道)、波の引けてた時見計らって通るため危険であった。
そこで、明暦元年9月朝鮮の仕官が来日するのを機会に丘陵の傾斜を削って新道をを造った(中道)。急斜面のため崩れやすく、凸凹で歩き難かったので元禄、享保になってさらに上のほうに道を造った(上道)。
峠からの景色はすばらしいが、戦いの場でもあった。正平5年(1530)足利尊氏と弟の直義の戦い。永禄12年(1569)武田信玄と今川・北条の連合軍が対峙した。
歌舞伎・狂言作者、河竹黙阿弥の"切られお富"の与三郎とお富の再会の場所。

由比宿　興津宿から2里12町

本陣1、脇本陣1、問屋1、旅籠32．町並み東西5町30間
海岸と急な丘陵に挟まれた漁村。人足100、馬100匹など伝馬制度には苦労した小さな宿場。その割りに旅籠の数は多かったという。名物　さくらえび
鎌倉時代は湯居と言われた宿場であった。　源頼朝からこの地域を安堵された大宅光延の子孫が由比氏と名乗っていた。駿府守護今川氏の守護代を勤めていたが今川氏が滅びると子孫光広は帰農、その末裔が宿の役勤めたという。

由比本陣公園

由比氏の子孫、岩辺氏が経営。敷地には母屋、離れ座敷、土蔵等があった。母屋は明治に解体。その他は平成元年解体、3年から、由比本陣公園として整備される。
園内には"県指定天然記念物　由比本陣の松"の碑、庭園は小堀遠州作云われる。入口には明治11年の明治天皇小休所の碑がある

鞍佐里神社

「日本武尊が東征の途中、賊の焼き打ちに遭い自ら鞍下に居して神明に念ず、其鞍、敵の火矢によって焼け破られ尽くした。よって鞍去りの名あり」と伝えられ、鞍去が倉沢と転訛したものといわれる。
拝殿の墓股は尊が野火を打ち払うところの彫刻。
神社は元は峠の山中に、後ここに移される。

望嶽亭

茶店、旅の途次、峠を前にここで一休み、詩歌俳諧など残す人多かったという。
山岡鉄舟は勝海舟の指示で西郷と駿府で会うべくここまで来たが不穏な動きを感じここの主人に匿ってもらい、主人の計らいで次郎長を頼って舟で清水港に向かう。

豊積神社　祭神木花開耶姫命

延暦16年征夷大将軍坂の上田村麿呂は蝦夷征討の途次、戦勝を祈願。帰途も立ち寄り戦勝祝いに奏上したのが今に残る"神楽がお太鼓祭り"（東海の奇祭）

正雪・紺屋

由比正雪の生家"の表示のある家、代々紺屋を営んでいた。正雪は慶安4年(1651)丸橋忠弥と共に幕府転覆を企てるが失敗、駿府宿梅屋で追っ手に囲まれ自決。
事実は駿府の宮ヵ崎の生まれ、岡村右衛門の次男、久米、民部之助正雪という。

明治の郵便局舎

宿制度の廃止により問屋場に勤務していた朝日麟一氏が飛脚屋と呼ばれる郵便業務を始め、その後郵便局となり、昭和2年まで使用される。